

十勝沖における市民参加型海鳥・海獣類調査と人材育成

NPO 法人日本野鳥の会十勝支部 千嶋淳

世界の海鳥の約 1/3 は絶滅の危機に瀕しており、その要因の多くは海洋汚染や漁業との軋轢、繁殖地への捕食者の持ち込みなど人間に由来するものです。国内においても状況は同様ですが、特に生涯の大半を過ごす洋上で分布や生態はよくわかっていません。私たちは 2010 年から浦幌町厚内の十勝沖で小型船をチャーターして海鳥、また同様に海洋生態系の高次捕食者である海獣類の分布や季節変化を調べてきました。その結果、世界各地からの希少種を含む海の動物たちが行き交う交差点のような海域であることが見えてきましたが、全貌を明らかにするには程遠く、また絶えず変動する海の環境と同じく年や季節による変化も大きく、長期間のモニタリングが必要と感じています。

そこで本事業では市民参加型調査の強みを生かして、人材育成にも力を入れながらこれまでの活動を継続・発展させることに主眼を置きました。2015 年 7 月から 2016 年 3 月の間に 7 回実施した参加型調査には 34 人のべ 68 名が参加し、リピーターも多く海洋動物の識別や調査法についても学ぶことができたと考えています。また、地元以外の参加者も少なくなかったことから、今後このような活動が各地に広まることを期待しています。

7 回の調査では 19 科 68 種の鳥類と 4 科 5 種の海獣類が観察され、カンムリウミスズメ、アホウドリなどの希少種も多数含まれていました。成果を列挙すればキリがありませんが、大きなものの一つに 8、9 月の調査で 14 羽ものコシジロアジサシを確認できたことがあります。アラスカやロシアで繁殖し、国内では迷鳥と考えられていたこの鳥は近年、同時期に北海道沖を定期的に通過することがわかってきて、当海域でのこれまでの記録に、霧多布沖で同様の調査を展開している NPO 法人エトピリカ基金のデータも合わせ、2015 年 9 月の日本鳥学会大会において共同でポスター発表を行いました。

もう一つ特筆すべき点を挙げるなら、12 月にエトロフウミスズメやコウミスズメがそれぞれ数千羽確認されたことがあります。これらの種はこれまで 2、3 月に多く観察され、海氷の進退に伴う季節変化を行うと考えていましたが、むしろ局所的な湧昇などによる動物プランクトンの発生量などが分布を決定している可能性があります。今後はプランクトンや魚類など、海洋動物の餌資源も視野に入れながら調べてゆく必要性を強く感じています。

出現した海鳥・海獣はすべて個体数や出現位置を記録してあるので、今後は水深、陸からの距離などについても解析を行い、特に重要な海域を抽出する予定です。

十勝沖での活動は本事業で 6 年目となりましたが、寿命の長い海洋動物を通じて海の環境を見つめ、その価値を地域に浸透させるにはまだ時間が必要です。備船、運営に関わる人材、予算の確保など課題も多いものの、「楽しみながらの継続」をモットーに息の長い活動を目指したいと思いますので、多くの方のご理解・ご協力をお願い申し上げます。



カマイルカとオオミズナギドリ



コシジロアジサシ



エトロフウミスズメ



カンムリウミスズメ